洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

佐々木英四郎（大正15年卒）氏のかくれた美挙について

京大名誉教授
大正六年卒　松田長三郎

去る六月十日、高松で開催の洛友会四国支部総会には、会長の鳥養先生がお差し支えのため、私が代って、教室の上ノ園教授、山本幹事とともに出席させて頂きました。新幹線が岡山まで延びたので岡山までは僅かに一時間二十分。四国までも近くなって来ました。本州・四国間の3路線が近く同時着工の由ですから、完成の暁きには一層近くなることと思われます。

それにつけても、宇高連絡船より見る水色は島々の山容は昔と変りは少ないようですが、汚染は可なりひどいように見受けました。環境保全対策が刻下の急務かと思われます。総会には、同支部の長老安藤・渡辺・北脇諸氏、徳田・平井四国電両常務、阿部支部長、今村・野中各幹事、その他松山・新居浜・徳島など遠隔の地からも多数ご来会になり、盛大な総会並びに懇親会でありました。そのあと、鳴門観潮や各地の名刹の参拝等、ご案内頂き、その他種々のご厚配を賜わり、一同感謝に堪えませんでした。同総会について、幹事の方からご報告があると思いますので、私は、総会の席上で、ご挨拶に併せて申し上げました一事について記載致します。京都大学創立七十周年を期して記念事業として企画しました募金の際、各業界、大学関係者、卒業生などよりそれぞれ醵金があり、大体目標の20億近く集まったようでありますが、四国への車中、山本さんから佐々木英四郎氏が百万円を寄贈された由を聞き、初耳であったので大変感謝した次第ですが、このことを総会の席上御披露しましたが誰れもご存じなかったようで、共々に感謝したことでした。恐らく個人の醵金としては、同氏のが最高額であったろうと思います。恐らく同級の方も、洛友会皆さんもご承知ないかと思いますので、本誌上を借りて、同氏のかくれた美挙に対しご披露するとともに心から、深甚な謝意を表する次第であります。ありがとう。

中部支部の囲碁会を観戦する

六月十一日(日)洛友会中部支部の囲碁会が催された。場所は名古屋駅前大東海ビルにある島村囲碁くらぶの一室である。午前十時半の開始に先だってまずくらぶのご当主である島村先生から激励のご挨拶があった。島村九段といえば日本棋院中部総本部の総師であられるので、いたっておだやかな句調ではあるが一同の気分はひきしまり対局の心構えができたようにうかがえた。ここでまず参加者を棋院免状の段位の順に列記すると本多静雄六段（大一三卒）、溝口毅六段（昭六卒）、古田久一四段（昭六卒）、外山敏夫四段（昭二二卒）、石川進四段（昭二六卒）といった具合で一応は豪華な顔ぶれといえないでもない。参加者のうち田中卓次さん（大一五卒）と吉村敏恭さん（大一五卒）は遠慮されて段位を表明されなかったので、一応田中さんは初段、吉村さんは三級にランクされた。

囲碁には自分で打つ楽しみと観戦する楽しみと二つあるが、書くとなると観戦記の方が読む者にとっては面白いのでなかろうか。

早速始まったH氏とF氏の対局を観戦した。F氏が置石を利用して雄大な大模様を展開しようとする作戦に対して、H氏は老練な突入作戦を推しすすめ波乱含みとはなったが、辛じてF氏がこれを最小限にくいとめた形で黒四目の勝となった、初めて観るT_1氏の棋風はなかなか堅実である。I氏との対局も中盤ではT_1氏やや不利と観戦されたのに要所要所を手抜きしない堅実さが物をいって次第に態勢を持ち直し、結局I氏を押し切った。

T_2氏は早打ちで相手をマイペースに誘いこむのが得意らしいが、上位であるM氏の渋い打ち方にはこの手も通じないらしく、いくつかの失着を突かれて観るも哀れな敗戦を喫した。しかし碁がたき同志の慣れた対局となるとムードは一変するらしい。T_2氏とI氏の対局は途中で形勢の逆転が二回もあるという乱戦で観る楽しさを満喫させてくれた。そして打ち終るや自己側の死体には目もくれず相手側の死体の拾い上げに喜色満面の景観は正に一幅の漫画でもあった。盤面の整理が終って初めてT_2氏の勝ちとわかった。これとは対称的に、M氏とT_1氏の対局は静寂な雰囲気の中に真剣の戦意みなぎるといった打ちぶりで中盤では互角の態勢だったが終盤になってM氏の寄せ勝ちとなった。そしてこれが結局優勝決定戦につながる勝負になってしまった。

こうして総当り戦を全部終えたのが午後四時頃で、星取表をみたところ、溝口毅さんが全勝優勝、田中卓次さんが五勝一敗で二等賞吉村敏恭さんが四勝二敗で三等賞と決まり、それぞれに大きな賞品が手渡されたのである。今回は中部支部として初めての催しで初手合せの方が多く掛け値のないハンディが決めにくい点があった。このハンディを補正する意味で早速今回の受賞者は次回には一目高く評価されることが確認された。今後、回を重ねるに従って漸次手合せのハンディも正確になり興味を加えてゆくものと思われる。

そもそも囲碁は限られた盤面内

での領地の取り合いであるから今日の経済競争とも、また兵法とも相通ずるものがある。徳川幕府が碁の家元に禄を与えて保護したのは碁を兵法の一助にしたという深い配慮があったのだという説明を聞いたことがあるが、その昔中国から伝来した囲碁が奈良、平安の大平の世に目ざましい流行をみたのはヒマで時間をもてあましていた貴族たちにとって碁がヒマつぶしに好適であったからにちがいない。現今の囲碁普及も大したものだが、その理由が両者のいずれに属するかを考えると、この中部洛友会の囲碁会に集った顔ぶれを見る限りでは一見後者に属するようにみえるが、碁は技術を知らなければやれないこと、知ってからのあとの奥行きの広さ、深さを考えると、囲碁は社会生活のコツをマスターするのに一脈通ずるものがないではないようである。しかし楽しむ碁会にそんなむつかしい詮索はやめることにしよう。

趣味を楽しむときは先輩後輩の区別も老若のへだたりも消えてしまう。そこで年齢に広がりの大きい洛友会員の親交には趣味の同好会ほど好適なものはないと思う。秋にはゴルフ大会が企画されているように聞く。万障繰り合せて若い会員諸兄のご参加を期待します。

（幹事記）

教室の近況

47.7.1現在

区分		講座名	教授・助教授・講師
電気系	電気工学科	電気磁気学	卯本・――
		計測・制御工学	西川・――
		発送配電工学	林(宗)・相馬
		電気機器	林(千)・上田・三宮
		電気応用工学	大谷・松原
		放電工学	阪口・野口
	電子工学科	電子物理学	板谷・百田
		量子エレクトロニクス	川端・津田
		半導体工学	田中・松波
		電子回路工学	――・――
		高周波工学	池上・中島・小倉
		電子装置	高木・佐々木
	電気工学第二学科	電気回路網学	木嶋・小沢
		自動制御工学	近藤・安藤
		電力系統工学	上之園・――
		エネルギー変換機器	岡田・――
		有線通信工学	前田・長尾
		無線通信工学	木村・――・鷹尾
共通講座		一般電気工学	浮田・安陪
情報工学科		情報基礎論	坂井・杉田
		論理回路	矢島・――
		計算機システム	萩原・渡辺
		計算機ソフトウェア	清野・池田
		情報処理	大野・――
		情報システム工学	――・――
研究施設	オートメーション	電子材料及回路素子	桑原・英保
	電離層	超高層物理学	加藤・大家
		超高層電波工学	小川・――
	超高温プラズマ	高温プラズマ工学	宇尾・飯吉
	原子エネルギー研究所*	粒子線工学	服部・岩住
		原子炉計測工学	若林・星野

*元工学研究所

先に本会報六十九号でもご報告しましたように電気系三教室の改組、情報工学科の新設に伴なって教官の移動、新任があり、現在の配置は右表の通りです。各教室とも六講座、学生定員四十名であり情報工学科は現在三回生まで在学しています。情報工学科の大野豊教授は東京大学機械工学科を昭和二十一年卒業、鉄道技術研究所で新幹線緑の窓口のお仕事を推進された方で、七月一日付で転任して来られました。

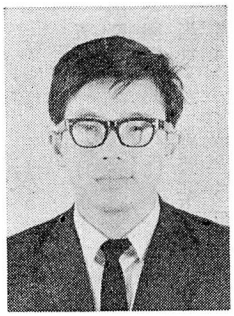
学生の就職状況は小数の会社を除いてはほぼ例年なみで、大学院進学希望者を除いた大半の学生の就職は決定しました。進学希望者については電気系の修士コース定員六十六名をかなり上廻る志望者があり、九月上旬入学試験を行なう予定です。

（林　千博記）

南極越冬を終えて

大学院修士課程在学中
昭和四十五年卒　伊藤正則

一九五七年のIGYに際して始められた南極観測事業も今年（一九七一年）で十二次を数えることになった。途中で三年間のブランクがあったが、その後新砕氷艦「ふじ」が建造され、昭和基地も一新されて恒久的な観測体制を整えている。第十二次観測隊は、第一次以来のベテランであり、オーロラの専門家でもある小口東大教授を隊長として、越冬隊三〇名、夏隊一〇名で構成され、「ロケットによるオーロラの直接観測」と「大陸氷観測のための内陸基地建設」という二つの大きなプロジェクトを携えて一九七〇年十一月二十五日東京港を出港した。奇しくも「ふじ」が大勢の人々に見送られて晴海岸壁を離れている頃、同じ東京の市ケ谷自衛隊駐屯地で三島由紀夫の割腹事件がおきており思えばその後の十二次隊の多事多難な経験の前兆であった様な気がしないでもなかった。出港直後にテレビのニュースでこの事件を知り大いに驚いたりしたが、それよ



りもこれから一年半、日本を離れる感傷と、未知の土地への期待と不安とに気持を高ぶらせていた。その後「ふじ」は順調に航海を続け、赤道通過に際しては「赤道祭」と称して仮装・演芸を競ったりしながら、十二月十日オーストラリア西海岸のパースの外港フリマントルに入港、そこで一週間程休養して、いよいよ暴風圏、氷海へと突入していった。このあたりから外界は尋常ではなくなり「初氷山が見えた」とか「パックアイスに入った」とか「ペンギンがいる！」といった声に「南極に近づいた」というある種の興奮を覚えながらカメラのシャッターをおしていた。十二月下旬本格的な氷海に入ってから「ふじ」はかなり苦労しながら進んでいたが、一九七一年の元旦は見渡す限り純白の氷海で迎えることになった。この頃は既に太陽は沈まなくなっており「初日の出」ということもないので日本的な感覚からいうと大分勘狂うのであるが、とにかく朝起きて最初に見た太陽を「初日」と呼ぶことにして、零下数度のひんやりとした冷気の中で、まもなく始まるであろう昭和基地への上陸と輸送建設の事を考え心を引緊めていた。ところが氷状は思ったより悪く「ふじ」の進行は遅々としてこれでは基地着はかなり遅れるのではないかと思っている矢先、一月十日スクリューの片方を破損してしまった。昨年に続き二度目の事故であるが、昨年は帰途であったのに比べ今年はまだ何一つ運んでいない。昭和基地までは三〇〇kmもある。これはどうなることかと一瞬暗たんたる気持になった。しかしこれから氷状はよくなる一方だからしばらくすればなんとか脱出できるだろうと思いなおし、ゆっくり待つことにした。船の中ではこれといってやる仕事もないので「ふじ大学」と称して、オーロラなど超高層物理学の話とか、気象、雪氷、生物、地球化学、医学、機械等々それぞれの専門の人たちが講師となって説明をし、質疑討論したりするのである。また天気のよい日は海氷上に出てソフトボールやスキーなどをやったりした。しかしなかなか氷状は好転せず、ビセットの最長記録を作ったとか、物資を十分運べない時は越冬隊員を縮少して「墓守り隊」にするか、あるいは最悪の場合越冬中止も考えられるという頃になると、われわれも内心おだやかでなくなってくる。その間に観測隊が航空測量のためにもってきた小型の飛行機を海氷上で組み立てて昭和基地へとばしたりした。そしてついに二月十日早朝「ふじ」の前方に大海水面が開け、艦内のわきかえる興奮の中で翌十一日には昭和基地北方一二〇kmに達し、そこからヘリコプターの第一便が昭和基地へ飛びたった。それから輸送、建設が始まるが、なにしろ例年より一ケ月以上も遅れており秋深い南極では外気温も下ってきており、たとえばセメントをミキサーでねるにしても水が凍ってしまうためにドラム缶でお湯をわかしてやるといった有様であった。それでも全員一致協力して頑張ったお蔭で三月中半までにロケット発射台のドームなどの大型資材を除いてほとんど輸送を終り、三十人全員の越冬が可能となった。ところが船が帰る直前になって越冬予定隊員の一人が病気になり船に帰ってしまった。そして三月十六日のヘリコプター便を最後に二九人による越冬生活が始まった。

昭和基地で行なわれている観測項目としては、極光、地磁気、宇宙線、電離層、VLF（超低周波帯）電波、音波等の超高層観測の他に気象、生物、雪氷、医学、地震、地形地質などがある。私は主に小口隊長と一緒にオーロラ、地磁気、VLFの観測を担当していたが、オーロラが全天を乱舞する時の美しさは忘我として見とれ、筆舌に尽し難いものがある。また極地ではオーロラの出現に伴って地磁気の急変やVLFエミッション、電離層の電子密度の急増など超高層の擾乱現象が顕著に現われるので学問的にも大いに興味をかきたてられる。十二次の主目的としてオーロラ中にロケットを打込み、そこでの電場磁場、電子密度X線等を直接測定するために一段式のロケット七基をもっていたが一晩中スタンバイしてオーロラの出現をまっていても、一週間も二週間もオーロラが出ず随分焦った事もあった。それでも十月初めのオーロラが終る頃までに一応予定通りの実験を終える事ができた。一方内陸基地建設も予定が大巾に遅れたため、太陽が出なくなった五月末に出発し、気温零下四〇度風速二〇米の暗黒の大陸でルート偵察に苦心しながらも昭和基地南東三〇〇kmの地点に基地を完成し七月下旬ブリザードの中を昭和基地に帰投した。本格的な大陸氷観測は九月初めに再び出かけ、それから一月初めまで行なうことになった。なお十三次以降では冬の間もこの基地で越冬し、大陸氷と気象の観測を行なう事になっている。

十月も中半になると日が長くなって暗夜がなくなり、オーロラのシーズンも終りである。この頃になると気温も上昇してくるので、戸外での作業や沿岸部の調査、内陸への支援旅行が行なわれる。私も十月後半に内陸基地まで往復したが天気さえ良ければ片道四日である。しかし行けども行けども見渡す限りの大雪原の単調な景色であり、気温も零下三十度、風速も定常的に二十米位あり、さすがに内陸は厳しい――逆に言えばさすがに南極らしいという感じである。それに比べると沿岸部の旅行は氷山あり、露岩あり、氷蝕地形ありで気温も暖かいので楽しい限りである。また十一月になるとペンギンが近くの島に産卵に来るのでそれを見学に行くこともある。ペンギンは人を恐れないし、短い足でよちよち歩くところは大変愛嬌があって面白い。またこれは一夫一婦制で必ずペアになって巣作りをやり、産卵した後は一方が卵を暖め、他方は沖へ出て行って餌の魚を食べてきて巣に帰ると相棒と交代するのであるが、その間一ケ月近く一方は何も食べないでひなを暖めている。さすがこの様な厳しい自然の中で生存している動物には特殊な能力が備っているものだと感心させられる。

基地での我々の食生活はどうかと言うと、冷凍肉を中心にわりと栄養豊富であるが、越冬後半になると野菜や鮮魚が不足してきて大へん恋しくなる。年があけて再び「ふじ」がやってくると第一便で野菜、果物が送ってくるが感激の至りである。今年は元旦に第一便がとんできて十三次隊を迎えたがそれから約四十日間共同作業をやって、二月十一日ちょうど一年ぶりに昭和基地を離れ「ふじ」に帰った。去年も今年もついに「ふじ」はオングル島に接岸できなかったが、帰途またまた氷海で閉じ込められ、燃料も残り少なくなって再度ピンチに追い込まれた。「十二次隊はなんとビセットに縁の深いことか」と感心しながらも皆わりと落ち着いていた。そして南極も冬の始まる三月末に運よく氷が割れ始め、やっと脱出に成功四月十日ケープタウンに入港した。そこから空路四月二十二日に一年半ぶりに日本の土を踏んだ。

日本出発から帰国まではこれまでの隊のうち最長日数にもかかわらず、最短の基地生活、ビセット最長記録といった珍記録を残して第十二次越冬生活は終った。思えば忙しい一年間であったが全てが初めての経験でめずらしく無我夢中で動きまわっていたこの越冬生活において随分いろんなことを経験したけれども、特に氷海及びブリザードにおける自然の厳しさ、オーロラの神秘にして華麗そしてそのきまぐれさ等を通じて、生の自然に対する時は根気よく待つ事が必要であり、またそれだけに一瞬のチャンスでも見つけた時は、適確な判断と迅速な行動に全力を集中して、それを有効に生かしていく事が如何に大切であるかという事を痛感し、そしてまた、今さらながらに自然の力の偉大さ、底知れぬ奥深さを再認識した様に思う。

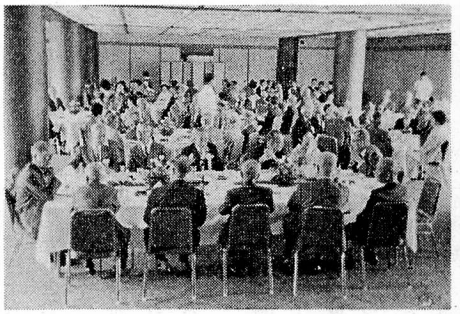
一九七二年六月記

昭和四十七年度 洛友会総会

五月廿一(日曜日)正午より京都国際ホテルに於て関西支部総会と合同にて開かれた。

当日、希望者は、午前十一時より電気教室を見学し、新設された情報工学教室や体育会などを大谷・近藤・卯本・木村教授の案内で参観し、又午後二時半懇親会終了後は二条城を見学した。

総会には鳥養会長をはじめ約一〇名(家族約十五名)の出席者があり、東京、名古屋、広島等から遠来の客を迎えた。特に名古屋より、中国支部長本多静雄氏以下十余名は支部総会を兼ねて出席され、賑やかな総会風景となった。

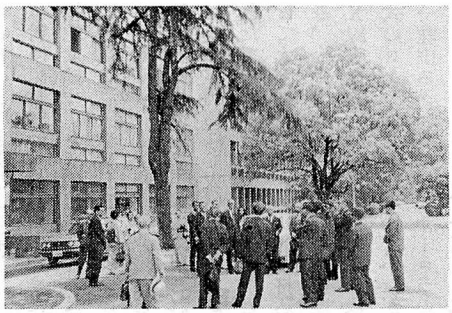


総会は、近藤教授の司会にて、型の如く鳥養会長の挨拶より始まった。大先輩組の出席率がよいのに反し、中堅層以下若い層の出席率が何時も悪いのを何とか改善することは出来ないものかとの御話があり、今後の運営或いは連絡方法について宿題を与えられた。若い会員の代表として昭和四十七年卒の近藤哲郎君が出席され、同君の挨拶があった。会員数が多いのでこれは年代別の会を開くより外によい方法は無いと思われる。続いて昭和四十六年度事業並びに決算報告、更に昭和四十七年度の収支予算に就いて山本幹事より報告がなされ、会員万場一致でこれを承認した。又役員改選に就いても、幹事の原案の通り、全員留任とし教室幹事を二名増員(田中哲郎教授、高木俊宜教授)することが可決された。

引き続き懇親会に移りテーブルスピーチには、遠来の先輩を交え次の各氏が挨拶された。

中部支部長　本多　静雄氏
東京支部　一本松珠璣氏
中国支部長　真田　安夫氏
東京支部電気講習所代表　井上弥三郎氏
関西支部副支部長　上西　亮二氏

(幹事山本記)



☆☆☆

第十七回洛友会四国支部総会開催について

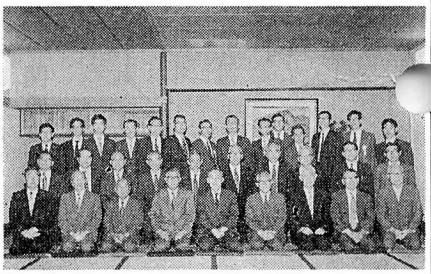
会員待望の四国支部総会は、新緑も鮮かな六月十日高松市において開催された。

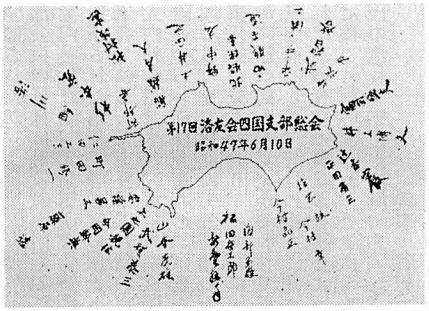
総会は本部より松田名誉教授、上之園教授、山本幹事のご出席を頂き、支部会員も総員八十一名の中、安藤昌三大先輩（大4）以下二十九名、更に旧会員の北脇先輩（昭5）の京都よりの特別参加を得て、総勢三十三名の盛会となり午後六時過ぎより始まった。恒例に従って年次報告、役員改選、本部よりの教室関係の近況報告があり、続いて懇親会に移り、洛友会ならびに教室の前途を祝して乾盃を行なった。

全員飲む程に酔う程に歓談に花が咲き、昔を偲びそして近況を語り合い、しばし時の過ぎるのも忘れる程であったが、予定の時刻も迫り、皆名残りを惜しみつつ午後九時半頃散会した。

尚、支部役員は阿部支部長（昭8）、原田副支部長（昭14）は留任、総幹事は今村幹事（昭32）から富田新幹事（昭23）にバトンタッチとなった。

（野中記）





昭和46年度収支決算書

昭和46年4月1日より
昭和47年3月31日まで

収入の部

科目	決算額	予算額
会費	1,933,200	1,850,000
電気講習所会費	207,900	180,000
預金利子	378,441	350,000
広告掲載料	1,586,950	1,200,500
雑収入	2,350	0
収入計	4,108,841	3,580,500
前年度繰越金	4,335,201	4,335,201
合計	8,444,042	7,915,701

支出の部

科目	決算額	予算額
刊行物費	3,088,030	2,505,000
名簿編集費	3,000	15,000
〃 印刷費	1,952,500	1,430,000
〃 発送費	435,590	450,000
会報編集費	15,300	10,000
〃 印刷費	255,200	300,000
〃 発送費	426,440	300,000
諸費	990,339	1,005,500
備品費	8,740	30,000
通信費	48,730	40,500
会合費	38,624	40,000
総会費	151,950	150,000
集金費	147,825	140,000
総掛費	315,000	350,000
旅費	279,470	255,000
臨時費	110,000	70,000
懇話会補助	110,000	70,000
支出計	4,188,369	3,580,500
次年度繰越金	4,255,673	4,335,201
合計	8,444,042	7,915,701

預金および現金（昭和47年3月31日現在）

信託預金	4,105,722	郵便振替	78,502
普通預金	40,575	現金	30,633
当座預金	241	合計	4,255,673

昭和47年度収支予算書

昭和47年4月1日より
昭和48年3月31日まで

収入の部

科目	予算額	前年度決算額
会費	2,300,000	1,933,200
電気講習所会費	220,000	207,900
預金利子	400,000	378,441
広告掲載料	1,500,000	1,586,950
雑収入	0	2,350
収入計	4,420,000	4,108,841
前年度繰越金	4,255,673	4,335,201
合計	8,675,673	8,444,042

支出の部

科目	予算額	前年度決算額
刊行物費	3,130,000	3,088,030
名簿編集費	10,000	3,000
〃 印刷費	1,800,000	1,952,500
〃 発送費	460,000	435,590
会報編集費	10,000	15,300
〃 印刷費	330,000	255,200
〃 発送費	520,000	426,440
諸費	1,180,000	990,339
備品費	30,000	8,740
通信費	70,000	48,730
会合費	50,000	38,624
総会費	230,000	151,950
集金費	150,000	147,825
総掛費	350,000	315,000
旅費	300,000	279,470
臨時費	110,000	110,000
懇話会補助	110,000	110,000
支出計	4,420,000	4,188,369
次年度繰越金	4,255,673	4,255,673
合計	8,675,673	8,444,042

洛友会東京支部総会開催さる

昭和四十七年度東京支部総会および新会員歓迎を兼ねた懇親会を出席者九〇名の多数を得て、六月三日目黒の八芳園で開催しました。

東京支部総会次第

1　開会の辞
2　吉岡支部長挨拶
3　昭和四十六年度行事報告、同決算報告
4　昭和四十七年度行事計画、同予算案審議
5　役員選出
　支部長　昭8　和気幸太郎
　副支部長　昭9　市村　宗明
　総務幹事昭28新　近藤　貞吉
　会計幹事　昭29　間瀬　光朗
6　来賓挨拶
　前田憲一先生
　日本学士院賞の授賞について
　林　千博先生
　教室の近況について
7　閉会の辞

此の度、目出たく日本学士院賞を受けられた前田憲一先生には授賞後のお忙しい日程の中、わざわざお出で頂き授賞にまつわるお話しを、また林千博先生からは教室の近況、教室の諸先生方のご活躍ぶりなどを伺い、総会出席者一同誠に心強く感銘した次第です。

当日はお日柄もよく、結婚式で色どられた八芳園の緑の中庭で、全員カメラに納まり、記念の一駒をしるしました。

場所を変えての懇親会では終始歓談に華がさき、にこやかな顔、顔で一杯でした。最後に大先輩真崎氏（大正4年卒）のご発声により洛友会の万才を三唱して、短いかたらいを惜しみつつ散会しました。

なお、東京支部では左記諸先輩の録音テープを保有しております

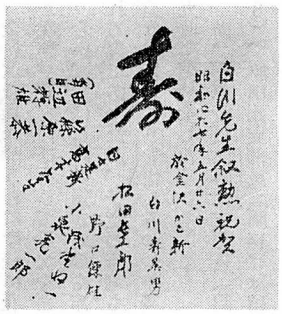
昭37　多田耕象　明40　宮井誠吉
明41宝来勇四郎　明43　高橋　保
明44　大森　丙　明45　古田正康
明45鳥養利三郎　大2　宮崎駒吉
大3　長島正隆　大4　真崎尚忠
大6　大西冬蔵

（総務幹事　近藤貞吉記）

白川寿美男先生叙勲祝賀会

金沢工業大学教授白川先生（大正15年卒）には、去る四月二十七日の春の叙勲において多年の研究・教育に対するご功績（静岡大学・信州大学・金沢工業大学各教授）により、勲三等旭日章を受けられたことについて、金沢在住の洛友会の皆さんが、五月廿六日料亭川新で祝賀会を開かれ、私も偶々同大学に講義に行ったので、招かれて同席させて頂き、共々に同氏の栄誉を讃え、ご健康を祝福した次第でした。同大学には洛友会員の小泉、篠原両教授もおられます。同地在住の洛友会員はご静養中の坂井次三郎氏および現地の発電所にお勤めの本年卒業の方を除いて、八名の皆出席の由で、和やかな心温まる賀宴でありました。

（松一長三郎記）



昭和二十七年卒
二十周年同窓会

この度、卒業二十周年記念同窓会を左記のように開催しましたところ、多数の恩師のご来臨を得て盛大で意義深い会合となりました。

一、行事四十七年四月二十九日
　(イ)　記念碑除幕および植樹祭
　　（電気工学教室前にて）
　(ロ)　晩さん会
　　野村卓也氏挨拶
　　上田保之氏司会
　　松田先生（乾杯）、前田先生ほか、ご出席の恩師よりご挨拶、卒業生自己紹介等あり。
二、出席
　(イ)　恩師　松田、林(重)（ご夫妻）、前田、林(千)、清野、大谷池上、近藤、上之園、伴（元事務官）
　(ロ)　卒業生　青木、和泉、伊藤今井、上田、大家、加子、門元、加納、久保、栗原、重本、龍沢、忠末、塚本、津田、高柳、東松、根来、野田、野村、松野、室賀、林、宇尾、佐藤、以上。

（林宗明記）

東京デルタ会

洛友会東京支部――東京デルタ会（電気講習所出身同窓会）の春の集会を東京都千代田区有楽町新有楽町ビル内東京電気倶楽部に於いて、昭和四十七年四月十五日（土）に開催致しました。

京都より立石亮三先輩の特別参加を得、亦、何年振りかに出席した珍客を加え、盛大裡に自己紹介をしながら、昔話に花を咲かせ、実に楽しい一時を過ごしました。

出席者全員、次の東京デルタ会での再会を約し、写真撮影寄書を行ないました。

（SN記）

昭和四七年度
関西支部総会

本年の支部総会は本部総会と併催で行われた。従って当日の模様及行事は本部総会の記事を参照されたい。

野田支部長より次の事項が報告提案され、いづれも承認された。

一、四六年度事業報告及決算
二、四七年度事業予定及予算
三、本部会費改訂に関連する支部規則一部変更
四、評議員（最近卒業生）の追加選任
　44年　佐々木峯夫、吉田昌春
　　張間寛一
　45年　高見昭宏、仲谷楠則、工原美樹

本年の秋の家族旅行は十一月十二日、貸切観光船による琵琶湖周遊としますので、多数の御参加を期待します。

（総務幹事記）

訃音

昭12　河野　明　47・4
昭18　岩波俊夫　47・4・14
講大5　坂井　浩
講昭9　今江藤吉　46・1・8
講昭14　樋口　猛　47・1・1

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

本号に報告されている通り、去る五月二十一日本部総会が京都で開催されたが、その総会の前に、一部会員の皆様に母校教室附近のご案内をした際、元講習所建物跡に新築された情報工学教室の屋上へ筆者もはじめて上り、五月晴の京大内外を見渡すと、電気教室玄関附近の古い赤煉瓦造りの二階建を埋めるように取囲んで五階建の新築建物が並んでおり、その間に僅かに緑の樹木が見えかくれする風景を前にして、昔日の樹木に囲まれた赤煉瓦建の風景が今更のように懐しく思い出され、ここにも時代の流れを感じた次第であった。

（幹事大谷記）